

1 人はなぜ旅をするのか



橋本 俊哉
HASHIMOTO Toshiya

立教大学観光研究所長／立教大学観光学部教授

人類の歴史の中、『旅』を続けたことで現在の我々が存在すると言っても過言ではない。旅する理由をいろいろと考察すると、旅の背景や心理が見えてくる。旅は『時代を反映する鏡』とも言われ、今を生きる我々にもよく当てはまる。より多くの気づき、発見、驚きを得る『旅するところ』とは？

人は旅をすることで進化してきた

アフリカで誕生した人類は、ユーラシア大陸からアメリカ大陸の南端までの長い旅を経て現在に至っています。北へ移動した人びとは寒さに耐えながら毛皮を身にまとい、暖をとる工夫をして定住しました。海に向かった人びとは、星を頼りに方位を知る術を身につけて住処を広げていきました。私たち人類は、移動しながらさまざまな刺激を得て、新しい環境に適応しながら進化してきたと言えます。¹⁾

人が旅する理由は時代によって段階的に移り変わっていきます。日本では、定住してからも食糧を

確保するなど「生きるための旅」の時代が長く続き、律令制度が完成すると、民衆には租税の献納や都の建設、防人など、支配者からの「命令による旅」が強いられるようになりました。当時は野宿が一般的で、夜盗や獣に襲われる危険もあり、貨幣の流通もごく一部に限られていたため、大変過酷だったことでしょう。これらは生きてゆくという内圧や命令という外圧による、自分の意志とは関係ない「強制された旅」でした。

やがてこれらとは基本的に異なる旅がみられるようになります。現在の私たちがイメージする「旅」は通常、各自の自由意思にもとづく「自ら好んでする旅」です。庶民の場合、除災招福を求める旅が平安末期に始まり、目的地も熊野詣から次第に伊勢神宮へ移り、室町時代になると伊勢信仰が民衆の間に広く根を下ろすようになります。伊勢神宮は国家最高神であり国民の総民神ですから、参宮が国民の義務との観念が一段と広まり、とくに江戸時代中期以降になると、「信仰」というテーマを巧みにかいくぐって、多くの庶民が「楽しみの旅」に出かけるようになったのです。

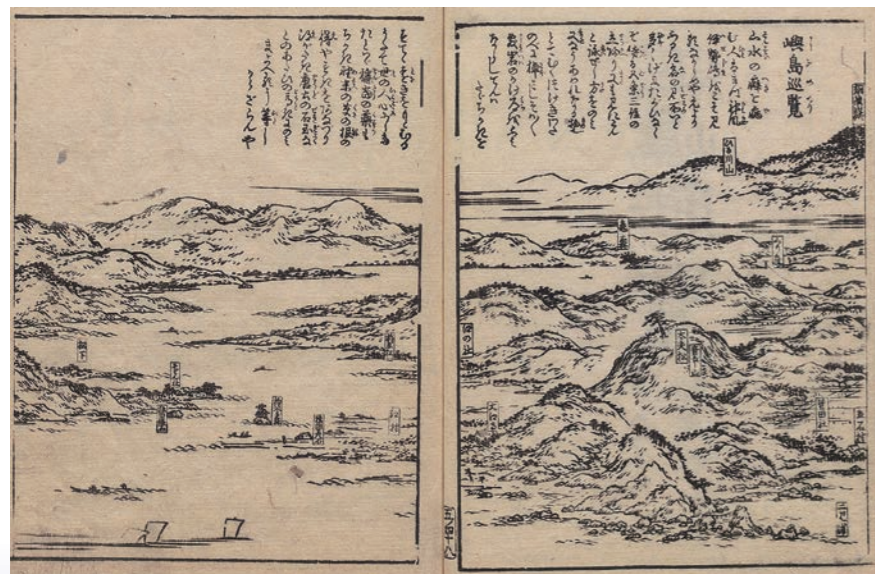


図1 嶋島巡覧『伊勢参宮名所図会』
庶民の「お伊勢参り」は参宮のついでに諸国の名所をめぐる格好の機会であった



写真1 「ワンダーラスト型」と「サンラスト型」(左:英国、右:ハワイ)
人は「さすらいたい」と「よどみたい」という志向性を併せもっている

「さすらいたい」と「よどみたい」

英国の研究者グレイは、人が旅をする志向には2つの基本的な方向性があると考え、ワンダーラスト(Wanderlust)とサンラスト(Sunlust)と名づけました。²⁾ wanderは“さまよい歩く”、lustは“求める”を意味するので、ワンダーラストは、異なる文化に接したり、遺跡を訪ねるなどを目的とした周遊型の旅への志向です。好奇心にもとづいて知識や見聞を広めるための旅といえます。対してサンラストは、やすらぎや快適さを求めてそれにふさわしい地に一時的に移動する滞在型の旅への志向です。やすらぎや快適さを求める場所の象徴として“sun”(=太陽がふりそそぐこと)が用いられているのは、とくに冬場に曇天が続く、ビーチリゾートに憧れるヨーロッパの研究者ならではの発想です。

私たちが通常「旅」としてイメージするのは「ワンダーラスト型」のほうですが、それは定住しているからであって、遊牧民はオアシスでの滞在にあこがれるでしょう。また個々人がどちらを好むかということもありますし、同じ人であっても、その時の気分や関心、同行者などによっても違ってきます。人はワンダーラスト＝「さすらいたい」とサンラスト＝「よどみたい」という、異なるベクトルの旅の志向性を併せもっているのです。

休息、交流、好奇心

ワンダーラストとサンラストは人が旅に求める志向性として理解しやすいものです。しかし、それはあ

くまでも、「どのような旅に出たいか」という願望であって、経済的な余裕と自由時間がなければ実際には旅に出ることはできません。では、お金と時間の余裕ができると、人はなぜ旅に出かけるのでしょうか。

日本の若者の心理を分析した古典的な研究では、3つの「旅行動機」が指摘されています。³⁾ まずは日常生活の束縛からの一時的解放です【緊張解除の動機】。日常生活が多忙になればなるほど、気分転換をしたい、わずらわしさから逃れたいと感じるものです。旅に出て一時的に業務から解放されて身体的・精神的両面で「休息」し、リフレッシュすることが戻ってからの労働意欲につながります。世界規模で市場動向を追いかける金融関係者や病院勤務者など、24時間休みなく稼働する職場に加え、とくに現代ではディスプレイから離れられない業務に携わる人も増えているので、「癒しの旅」やデジタルデトックスを目的とした「自然を求める旅」へのニーズも高まっています。

2つ目は人々との出会いや交流です【社会的動機】。行く先々での思わぬ出会いは旅の忘れがたい思い出となりますし、卒業旅行や昔の仲間との記念旅行は気の置けない同行者との「交流」のための思い出づくりの旅です。また、リピーター客は馴染みの宿の主人や女将に会いに行くようなものですし、渋滞を承知で毎年ふるさとに帰省するのも、家族や親戚をはじめとした大切な人たちに会いに行くためです。「誰かに会いに行く」ことは、人の移動を後押しする重要な要因です。

3つ目は好奇心や未知へのあこがれです【自己実現にかかわる動機】。時には苦勞してでも旅先で新しいことを知ったり発見する喜びは、まさに人間だからこそ、自身の成長や自己実現につながる旅の醍醐味です。フランスの「旅は若者を育てる」ということわざは、このことを端的に示しているといえるでしょう。旅を通じて知識や発見を積み重ねることで私たちは成長するのです。

これらの「旅行動機」は旅行目的と言い換えて差し支えありません。実際には目的がクロスオーバーする場合も少なくないので、この研究は、人がさまざまな目的や理由によって旅をするを示した興味深いものと言えるでしょう。

人の移動は人類の歴史とともにあり、古今東西、その時代を象徴するような旅が繰り返されてきましたので、旅は「時代を反映する鏡」と言われることがあります。現代では移動手段が飛躍的に便利になり、私たちは「自ら好んでする旅」を自由に楽しむようになりました。都市で暮らし日常生活が「ハ



写真2 人の心を癒すブナの森(長野)
デジタル化社会が進むほど「自然を求める旅」へのニーズは高まる

レ」の連続である人たちにとっては、静かな空間に旅して過ごす時間を作ることも大切です。現代は楽しみの選択肢も数多く、旅をする理由も多彩となっていますので、「人はなぜ旅をするのか」に答えることは、ますます難しくなっています。旅は私たちに「生きる力」の源です。これからも旅は、私たちの暮らしに欠かせない存在であり続けるでしょう。

旅する人の心理

移動手段が発達し、海外旅行も身近になった現代は情報も格段に手に入れやすくなり、宿泊施設の水準も以前とは比較できないほど高くなりました。先にあげた3つの目的でいえば、休息や交流と親和性の高い「サンラスト型」の旅については、より快適な環境の中で「観光」を楽しむ時代となりました。対して、人間が進化する推進力となった、好奇心を満たすような「ワンダーラスト型」の旅はどうでしょうか。

旅をする人の心理の一般的特



写真3 マヤ遺跡でジャングルを眺め続ける(グアテマラ)
個人型の旅は印象が強く刻まれ思い出に残りやすい



写真4 路端の店をのぞき込む若者たち(東京・谷中)
好奇心をもてば身近な場所にも興味深い場所は少なくない

徴は「緊張感と解放感という相反する感覚が同時に高まる」ことにあり、この心理のバランスは旅行形態によって違いがみられます。⁴⁾ 日常生活から一時的に離れることによる“気楽さ”を感じる意識が解放感で、肉体的にも精神的にもくつろげる状態です。団体型・サンラスト型の旅はこのような「解放感優位型」となりやすいのに対し、よく知らない土地を巡るような個人型・ワンダーラスト型の旅は「緊張感優位型」になる傾向があります。緊張感が高い状態は感受性を高めることに作用し、情緒的反応も活発になります。そのため、日常生活の場合よりも好き嫌いや快・不快などの感情が刻まれやすくなるので、印象深い経験に満ちたものになりやすいのです。新型コロナの移動制限から解放された今こそ、知的好奇心を刺激するようなワンダーラスト型の旅の価値が見直され、さまざまな形で展開してゆくことでしょう。

“旅するところ”をもって暮らす

同じ場所を旅したとしても、そこから多くの気づきを得られる人とそうでない人がいます。訪問先で

本人が何を感じとるか、それは旅をする人自身の受け止め次第です。新型コロナで移動が制限されたことで、身近にも素晴らしい場所があることに気づかされた方も少なくないでしょう。その土地の発する情報をいかにとらえ、刺激を受けながら自分自身をどう見つめるか。写真や動画に「記録」する以上に大切なのは、旅する視点をもって自らの足で歩き、自らの網膜に情景を焼きつけ、五感を通じて「記憶」する体験を重ねることです。そうした姿勢を持てば、遠くに足を延ばすことなしにも、新たな気づきは得られるものです。これからも旅先で多くの発見や驚きを得られるよう、そしてさまざまな「好奇心」を持ち人生を楽しむためにも、日ごろから“旅するところ”を忘れずに、自らのアンテナの感度を高める暮らしを心がけたいものです。

<参考資料>

- 1) 寺島実郎 2015 「新・観光立国論」 NHK出版
- 2) Gray,H.P. 1970 International Travel-International Trade, Heath Lexington Books
- 3) 今井省吾他 1969 「観光の心理分析」 日本交通公社
- 4) 前田勇・橋本俊哉 2021 「観光行動を成立させるもの」『新現代観光総論第3版』学文社